琉球大学学術リポジトリ

中学校における英語教育の実態調査(1)：沖縄県A中学校における事例から

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2015-11-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大城, 賢, 宮里, 征吾, 浜田, 麻由子, Oshiro, Ken, Miyazato, Seigo, Hamada, Mayuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32315

中学校における英語教育の実態調査（Ⅰ）

～沖縄県Ａ中学校における事例から～

大城　賢 *　宮里征吾 **　浜田麻由子 ***

1．調査の目的

2007年に43年ぶりとなる全国学力テストの結果が公表された。沖縄県の児童・生徒の正答率はどの学年でも、どの教科でも最下位であった。以来、沖縄県の正答率の低さはほとんど変わらず今日に至っている。全国学力テストの実施以来、どの県においても児童・生徒の学力問題が多くの人々の関心を集めるようになった。沖縄県も例外ではなく、県や市町村レベルで様々な取り組みがなされている。

全国学力テストは国語、算数・数学の２教科を対象に、小学校６年生と中学校３年生で実施されている。英語は実施されていない。英語においては、全国と比べると沖縄県はどのような状況なのか知りたいところであるが、現在のところ、それを知るためのデータは存在していない。

本調査は、日本における標準化されたテスト[1]の１つである公益財団法人日本英語検定協会の英語能力判定テスト（以下、「英語能力判定テスト」という）とアンケートを用いて、沖縄県の中学生の英語力の実態を調査することである。今回は、予備的調査として、沖縄県Ａ中学校生徒の実態を調査し検討を行う。

* 琉球大学教育学部　** 石田中学校教諭　*** 公益財団法人日本英語検定協会

[1]　標準化されたテスト＝テストの妥当性や信頼性を高めるために、実験的な使用が繰り返し行われ、受検者の能力などの測定方法や採点基準などが確立しているテスト。標準化されたテストを使用することにより、受検者個々の英語力の伸長や実施時期の異なる他のグループとの比較など信頼性の高い測定が可能になる。

2．Ａ校の概要

Ａ校は沖縄県の都市部に所在する学校である。調査時点（2014年１月）では１学年７クラス、２学年６クラス、３学年７クラスで全校生徒は745名であった。部活動も盛んな学校である。

3．調査の概要

生徒の英語力を調査するために、英語能力判定テスト（D）を実施した。また、生徒の学習に対する態度面の調査には筆者が作成したアンケートを実施した。

（１）参加者

１年生 202名
２年生 198名
３年生 246名

１学年１クラスのアンケート調査の回収ができず、そのクラスの34名は欠損データとして分析対象から除外した。

（２）使用したテスト

使用した英語能力判定テスト（Test D）は英検３級～５級の問題からできている。受検者の英語力を５級から３級の範囲で調査することができる。筆記50問（35分）、リスニング30問（15分）から構成されており、満点スコアは460点である。筆記は「語彙・熟語・文法」、「英文構成」、「読解」の３つの分野からできている。

（３）使用したアンケート

アンケートの内容は以下の13項目からできている。項目11～13以外は全て①強く

そう思う、②思う、③思わない、④全く思わない、の4件選択法をとっている。アンケート項目の1～3までが英語に対する好悪、4が英語理解に対する自己評価、5～7が国際社会における英語の果たす役割についての認識、8～10が家庭学習の状況、11が通塾の状況、12が部活動の状況、13が睡眠時間である。

（4）調査時期

2014年1月に全学年・全クラスにおいてテスト及びアンケートを実施した。

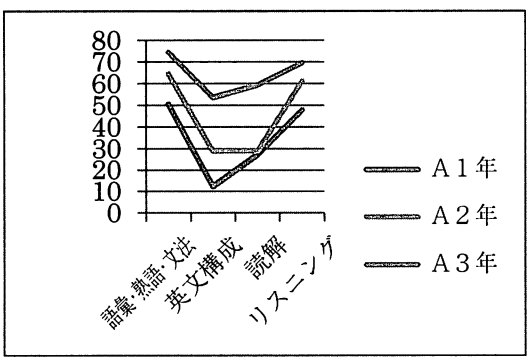
（5）英語能力判定テストの領域別の平均点を算出し、領域別の状況を分析する。また、学年毎の結果も比較し、問題があれば、その問題の原因を明らかにする。通塾や部活動などが成績とどのように関わっているのかについて明らかにする。さらに態度面と成績との関連を調査する。客観性を高めるため、他のグループとの比較を行う。

4．結果と考察

（1）分野別・学年別の成績比較

A中学校の学年ごとの総合点と領域ごとの平均点を示したのがグラフ1と表1である。総合点の平均は1年生が138点、2年生が183点、3年生が256点である。3つのグループは総合点、及び1年生と2年生の読解を除く分野別平均点においては統計的に有意な差がある。

グラフ1

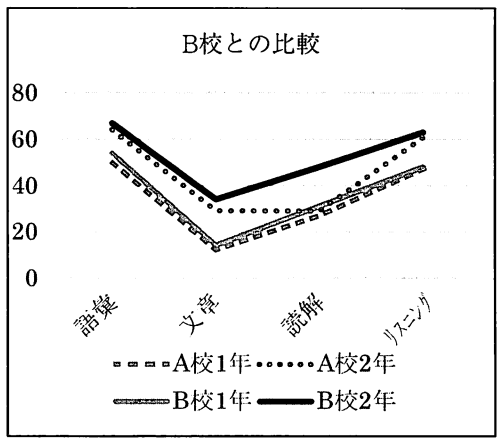


	A1年	A2年	A3年
語彙・熟語・文法	50.31101695	64.494	74.478
英語構成	12.373	28.788	53.629
読解	27.314	28.958	59.220
リスニング	47.823	61.044	69.653
合計	137.820339	183.284	256.980
SD	58.297	63.052	85.016

表1

2年生の読解分野はグラフを見ると分かるように落ち込みがある。この傾向は一般的に見られるものなのかを調査するためにB校[2]の結果を重ね合わせたのがグラフ2である。B校においてはどの領域においても2年生のほうが平行移動するように成績が伸びている。しかしA校においては読解分野のみが落ち込んでいることがわかる。

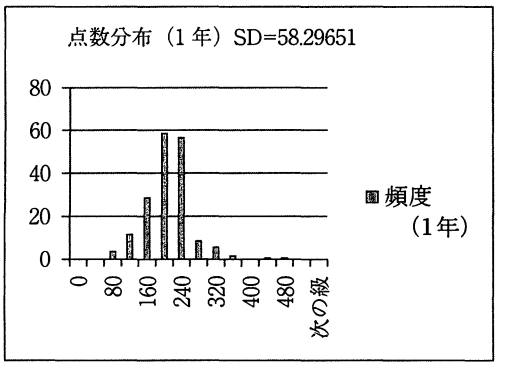
グラフ2



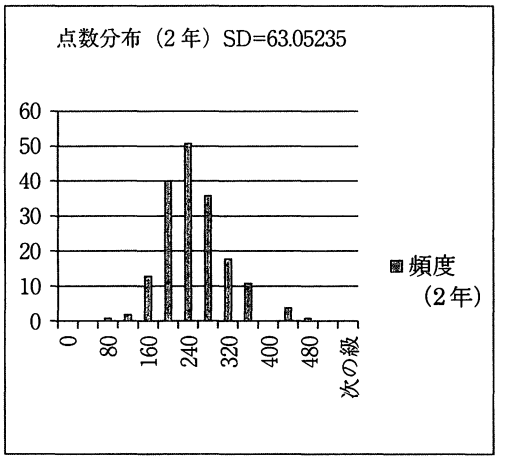
学年ごとの得点分布がグラフ3～5である。成績の山が左（低いところ）から右（左）に移動してきている。SD(標準偏差)をみると58、63、85となっている。学年が上がるにしたがって成績のバラつき度が大きくなっている。つまり、できる生徒と、指導を必要とする生徒の差が大きくなっている。学年が上がるにしたがって学習者間の差が拡がっていくことは一般的に言われていることであるが、A中学校でもその傾向が表れている。

[2] 沖縄県の離島の公立中学校。1年生186人，2年生188人。2013年2月に実施。

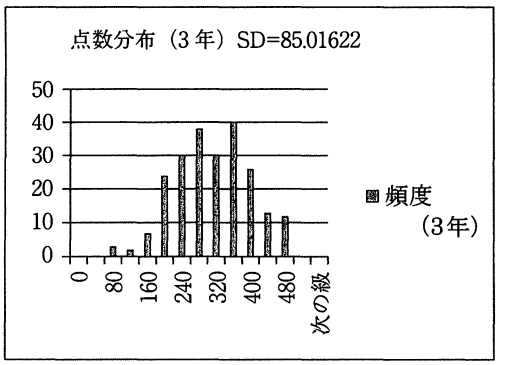
グラフ3



グラフ4



グラフ5



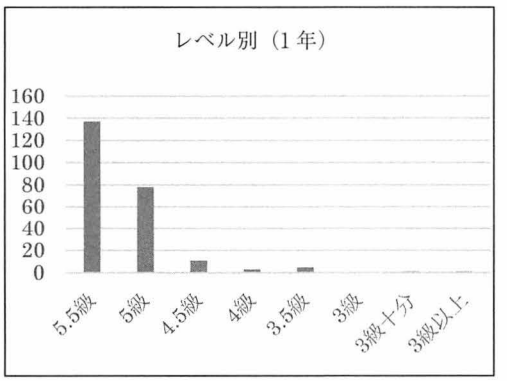
英語検定のレベル別の分布を示したのがグラフ6～8である。1年生の終了時点で5級レベル以下（初級レベル）が91%、2年生修了時点で59%、3年生終了時点では30%である。5級レベル以下の初級の生徒は1年生段階の9割から、2年生段階で6割となり、3年生で3割と減少している。3年生修了時点では4級以上レベルが一気に増え、全体の48%を占めている。1年生と2年生を比べると、グラフの形状は大きく変わることはなく、2年生では4.5級レベルの人数が増えた程度である。

公益財団法人日本英語検定協会が示した英検のレベル設定を見ると、4級は2年生修了程度である。A校の場合、4級以上のレベルの生徒の割合は16%であり目標にはほど遠い。しかし、全国レベルで見た場合、2年生修了時点で4級レベルの生徒がどの程度いるのかを示すデータは今のところ存在しない。ちなみに前述のB校の場合は4級以上のレベルの生徒の割合は約2倍の35%である。平均点でA校は231.4点、B校は247.6である。A校における読解力の落ち込みが平均点の差に影響しており、それが4級以上のレベルの生徒数へも影響している可能性が高い。

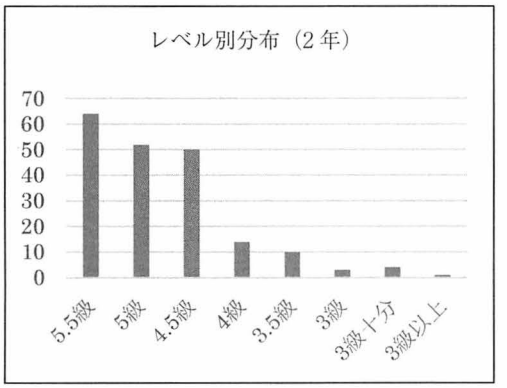
3年生になると、A校では上位級レベルの生徒が一気に増えており、4級以上の生徒が48%を占めている。しかし、一方で2極化の傾向も見られる。英検のレベル設定を見ると、3級は中学校3年生修了レベルである。また、文部科学省も中学校3年修了時点での目標値を英検3級としている。A校における3級レベル以上の生徒の割合は24%である。ちなみに、文部科学省が発表した2011年の調査によると、全国の公立中学3年生のうち英検3級以上の生徒と同等の力があると教員が判断した生徒は26%である[3]。A中学校の場合は、英検3級合格者の割合でみるとほぼ全国並みであると言えるだろう。

[3] 共同通信2012年1月31日（ネット版）「全国の公立中学3年のうち英検3級（中学卒業程度）以上の生徒と、同等の力があると教員が判断した生徒を合わせると26%だったことが31日、文部科学省の調査で分かった。調査は昨年（2011年）8～11月、東日本大震災で被災した岩手、宮城、福島の3県を除く公立中学9161校、高校3317校で実施した。中3のうち10%が3級以上を取得。資格はないが3級以上と同等の生徒は16%だった。」

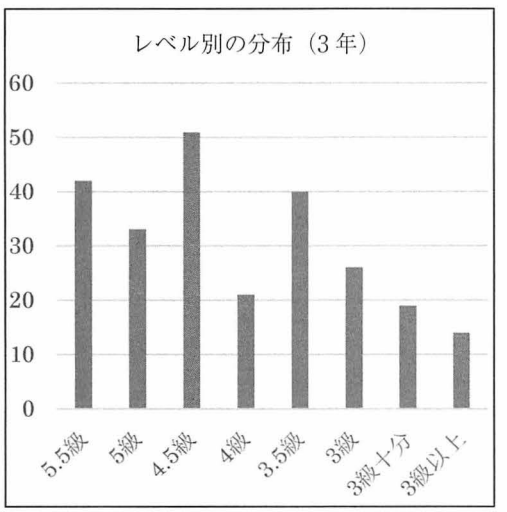
グラフ6



グラフ7



グラフ8



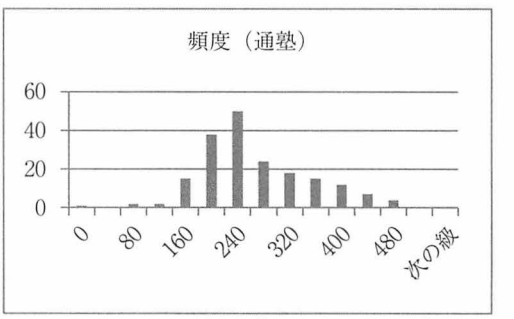
（2）　通塾と通塾無し生徒の成績の比較

通塾生と通塾無しの生徒を比べたのがグラフ9と10、表2である。F検定により両グループは等分散であることが分かったので、2群間で等分散を仮定したt検定を行った結果、統計的な有意差は認められなかった。(t=1.20775867, p=0.113816176)

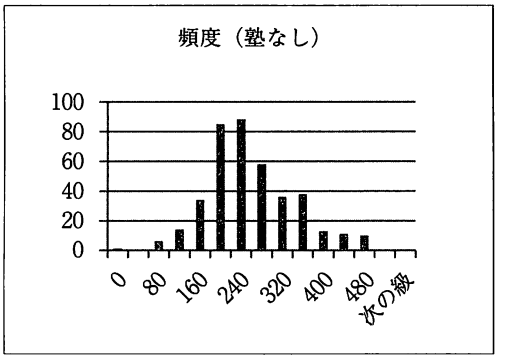
通塾生188人のうち240点以上の生徒は130人で69%、塾なし生徒394人のうち240点以上の生徒は254人で64%である。この結果をみても、通塾生のほうが成績上位者の割合が多いとは言えないことがわかる。

通塾生と塾なしのグループに成績上の差がないというのは一般的な常識を覆すものである。理由は2つ考えられる。塾の学習は中間や期末テスト対策が中心となっており、英語能力判定テストのように広範囲の内容を扱うテストには効果を出していない可能性があるということ。もう一つは成績下位層の生徒に塾へ通っている生徒が多い可能性があることである。この点に関してはさらに詳しいデータを収集する必要がある。現時点で明らかな点は、学校の勉強だけでも十分な成績を出している生徒が多いという点である。

グラフ9



グラフ 10



スコア（通塾）			スコア（塾なし）	
平均	248.9521		平均	239.9772
標準誤差	6.095232		標準誤差	4.229698
中央値	231		中央値	231
最頻値	231		最頻値	231
標準偏差	83.57361		標準偏差	83.95711
分散	6984.548		分散	7048.796
尖度	0.098806		尖度	0.139824
歪度	0.360609		歪度	0.419745
範囲	457		範囲	460
最小	0		最小	0
最大	457		最大	460
合計	46803		合計	94551
標本数	188		標本数	397
信頼区間	12.02425		信頼区間	8.315665

表 2

基本統計量						母平均の差の95%信頼区間			母平均の差の検定	
変数	変数1-1	変数2-1		2群の平均の差	8.975	t推定			t検定	
n	188	394		効果量（d）	0.107	下限値	-5.620		統計量t	1.208
平均	248.952	239.977		効果量（g）	0.107	上限値	23.570		自由度	580
不偏分散	6984.548	7048.796							両側P値	0.2276
標準偏差	83.574	83.957							片側P値	0.1138
									検出力（α=0.05・両側）	0.2261

表 3

（3）部活生と部活無し生徒の比較

部活生と部活なし生徒の成績を比べたのが以下の表である。記入漏れを除き、部活生299人、部活なし生284人を比較対象とした。2つのグループで平均値の差に関するt検定を行った結果、統計的な有意差が認められた。（t=-8.780, p<0.5）ただし、1年生に高スコア（準2級レベル）の生徒が2人存在しており、その二人を除くと有意差は認められなかった。

グラフ11と12からわかるように母数がほぼ同じ状況（299人、284人）の中で239点以下の生徒は部活生が131人（44％）、非部活生が67人（24％）である。逆に240点を超える生徒は部活生が168人（56％）、非部活生が217（76％）である。部活生にスコアの低い生徒が多く、非部活生にスコアの高い生徒が多い。今後は部活と学習のバランスを保つような指導が必要である。

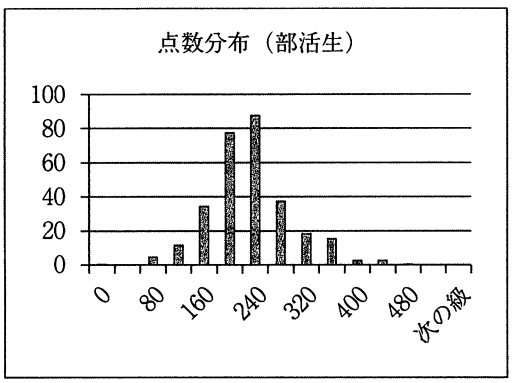
スコア（部活）			スコア（部活なし）	
平均	215.0535		平均	272.4683
標準誤差	3.9146		標準誤差	5.294801
中央値	218		中央値	278
最頻値	231		最頻値	231
標準偏差	67.68976		標準偏差	89.22958
分散	4581.903		分散	7961.918
尖度	0.816245		尖度	-0.31564
歪度	0.318358		歪度	0.10777
範囲	460		範囲	460
最小	0		最小	0
最大	460		最大	460
合計	64301		合計	77381
標本数	299		標本数	284
信頼区間	7.703762		信頼区間	104.2219

表 4

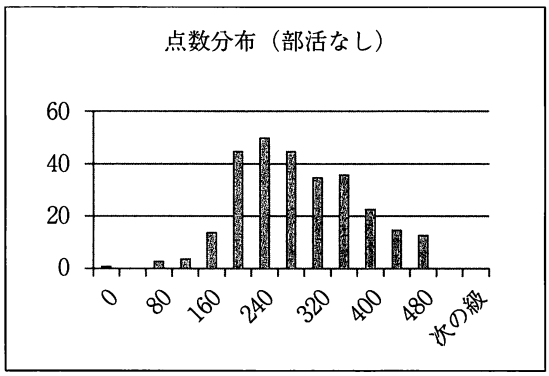
基本統計量					母平均の差の95%信頼区間		母平均の差の検定	
変数	変数1-1	変数2-1	2群の平均の差	-57.415	t推定		t検定	
n	299	284	効果量(d)	-0.729	下限値	-70.258	統計量t	-8.780
平均	215.054	272.468	効果量(g)	-0.728	上限値	-44.571	自由度	581
不偏分散	4581.903	7961.918					両側P値	0.0000
標準偏差	67.690	89.230					片側P値	0.0000
							検出力(α=0.05・両側)	1.0000

表5

グラフ11



グラフ12

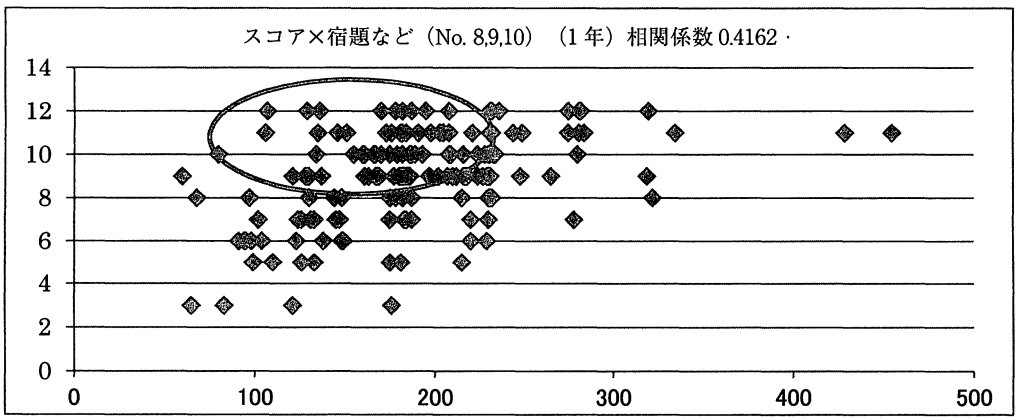


（4）予習・復習・宿題と学習成績の関連

「家で予習をしていますか・復習をしていますか・宿題をしていますか」とうアンケートに対して「ほとんどしている」を4点、「時々している」を3点、「ほとんどしていない」を2点、「まったくしていない」を1点として点数化し、テストの結果との相関をみたのがグラフ13～15である。1年生では0.4162（中程度の相関）、2年生では0.2003（弱い相関）、3年生では0.4644（中程度の相関）があることが分かった。

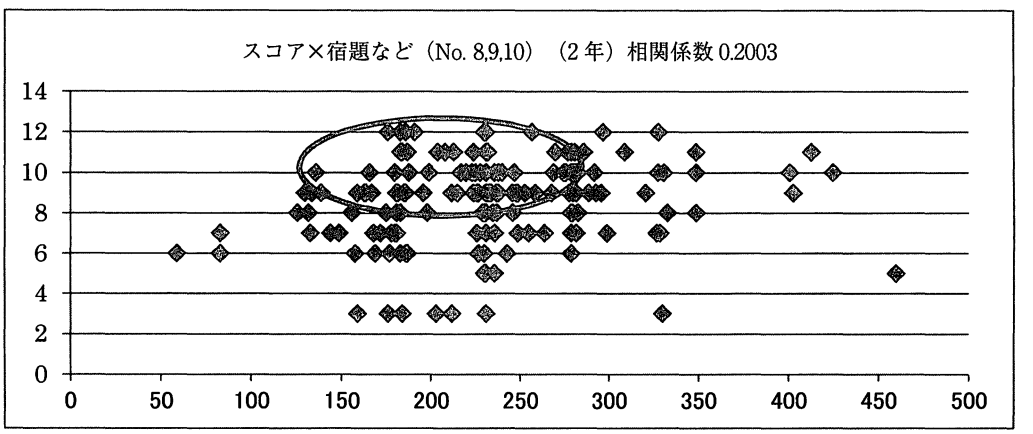
予習・復習・宿題とテストの成績の相関はそれほど高いものではなかった。つまり、予習・復習・宿題をしたからと言って、それが必ずしも成績に繋がっていない傾向がある。特に2年生の場合は弱い相関となっており、予習・復習・宿題のさせ方に課題がある可能性がある。

グラフ 13



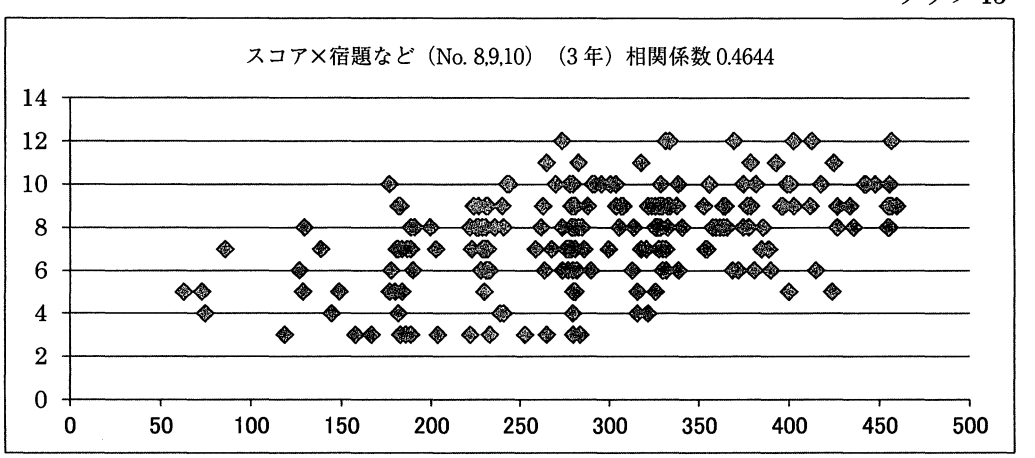
＊円枠は宿題はよくしているが成績が低いグループ

グラフ 14



＊円枠は宿題はよくしているが成績が低いグループ

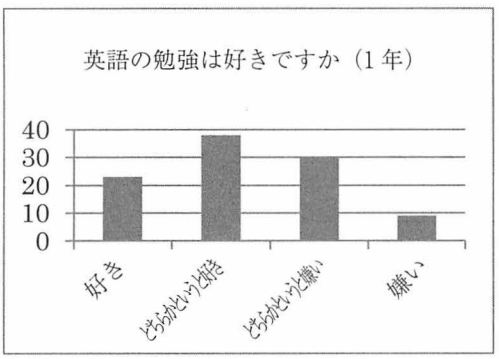
グラフ 15



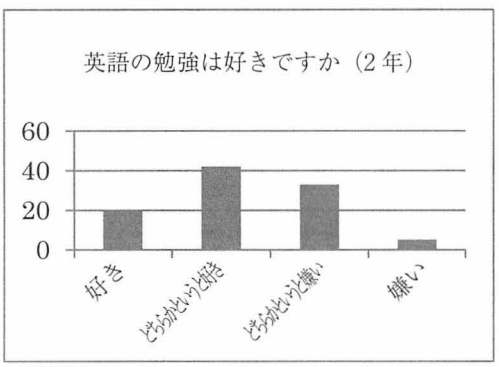
（5）英語の好き嫌い

学年毎の英語の勉強についての好き嫌いに関しては以下のとおりである。「好き・どちらかというと好き」を合わせた割合は1年生で61%、2年生で62%、3年生で61%とほとんど変化がない。一般的に学年が上がるにしたがって「英語の勉強が好き」という割合は下がっていく傾向にあると言われるが、A校ではそのような傾向は見られない。「好き」な生徒の割合だけを抜き出してみても、23%、20%、25%とほとんど変化がない。ベネッセが中学校2年生を対象に、好きな教科を複数回答で選ばせたところ、英語を選んだ生徒は25.5%であった[4]。質問の仕方が異なるので単純な比較はできないが、A中学校の2年生の英語に対する好き嫌いの割合はほぼ全国なみと言えるのかもしれない。

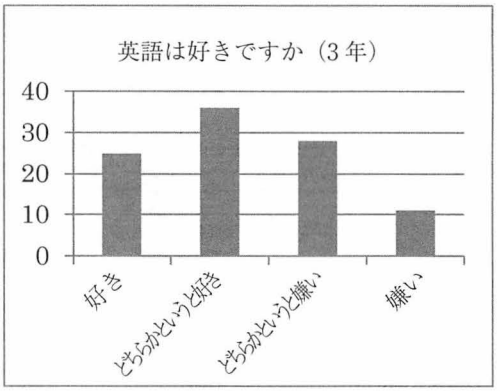
グラフ16



グラフ17



グラフ18



（6）英語の理解度

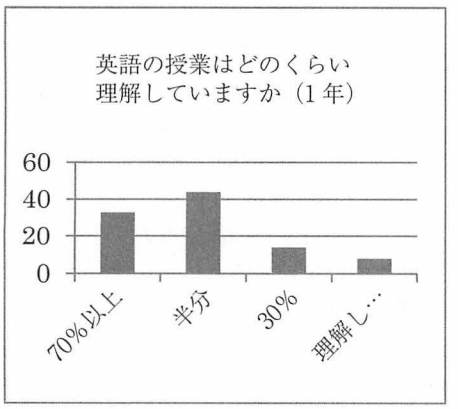
英語の理解度について、学年毎の結果はグラフ19～21のとおりである。3年生のほうで「70%以上理解している」という割合が増えている。英語の好悪と同じように、一般的には学年が上がるにしたがって理解度も下がる傾向にあるが、A中学校ではその傾向は見られない。なお、ベネッセが中学校2年生を対象とした調査で、「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」という回答を合わせると40.6%であったと報告している[5]。A中学校では「70%以上わかっている」とした生徒は33%である。アンケート方法が異なっているので単純に比較することはできないが、A中学校の2年生で、授業を理解している生徒の割合は全国平均と比べると低い、ということが言えるかもしれない。しかし、A中学校の3年生で「70%以上理解している」としている生徒は46%である。3年生についてはベネッセは調査をしていないので、全国平均と比較することができないが、おそらく、この数値は全国平均を上回るのではないかと予想される。また、授業の理解度は今回のテストスコアにも影響していると思われる。

---

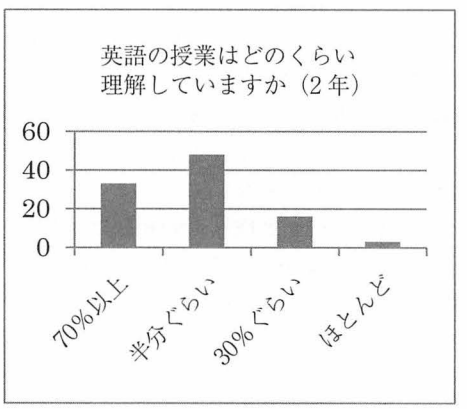
[4] ベネッセ「第1回中学校英語に関する基本調査」2009。2年生のみが対象となっており、1年生と3年生のデータはない。

[5] ベネッセ「第1回中学校英語に関する基本調査」2009。

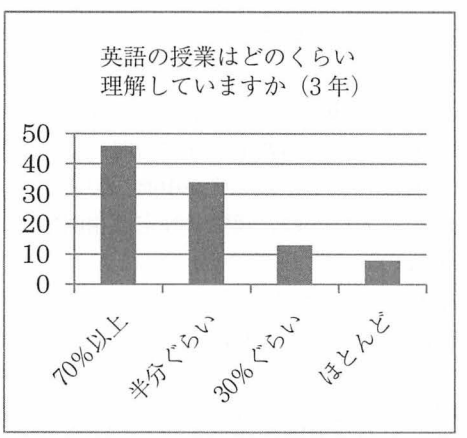
グラフ 19



グラフ 20



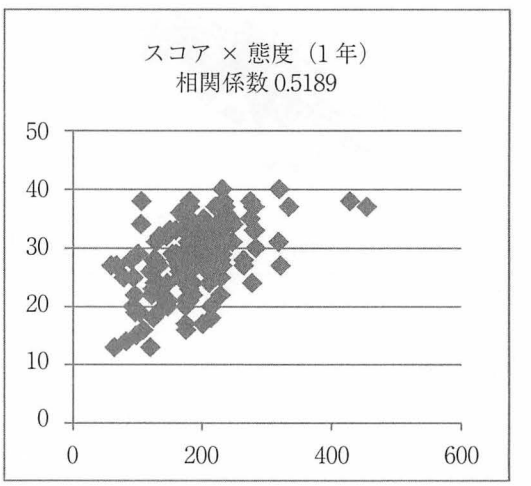
グラフ 21



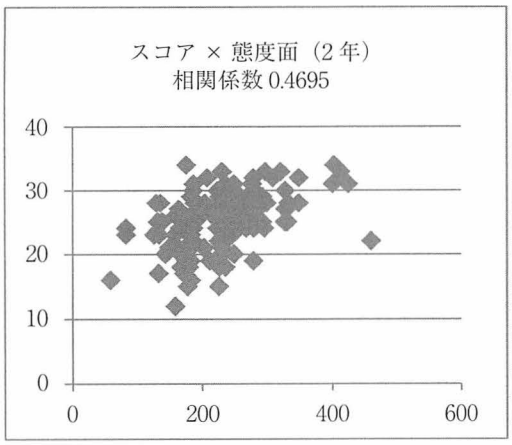
（7）態度面とスコアの相関について

最後に学年毎に、テストの点数と態度面の相関を調べた。態度面は前述したアンケートの回答項目を点数化した。例えば「英語は好きですか」という質問に対して「①とても好き」を4点、「②どちらかというと好き」を3点、「③あまり好きでない」を2点、「④嫌い」を1点とした。両者の関係をピアソンの相関係数で調べた。結果は1年生が $r=0.518$（中程度の相関）であり、無相関の検定は $p<0.05$ で有意であった。2年生は $r=0.4695$（中程度の相関）であり、無相関の検定は $p<0.05$ で有意であった。3年生は $r=0.6366$（中程度の相関）であり、無相関の検定は $p<0.05$ で有意であった。どの学年も中程度の相関であるが、2年生はr値が最も低く、3年生が最も高くなっている。3学年を通して言えることは、英語学習に対してポジティブであればあるほど、テストの結果もよいということが言える。

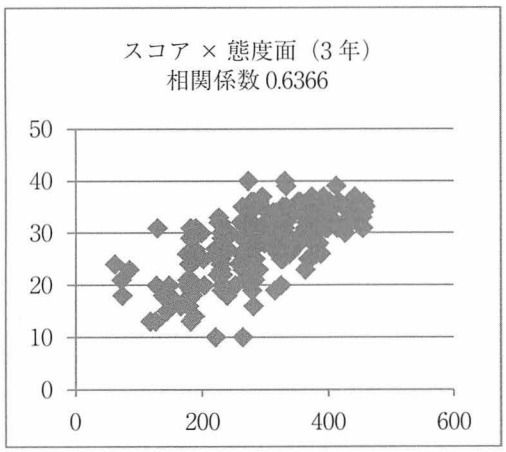
グラフ 22



グラフ 23



グラフ 24



5．結論

英語力の点からみると、学年が上がるごとに成績の向上がみられた。2年生では読解力に課題があることが分かった。ある程度の長さの英文を読みこなすには、当然のことではあるが、ある程度の長さの英文を読み慣れている必要がある。授業が文法や語彙に重点が置かれるものとなり、読解がややおろそかになった可能性がある。一般的な傾向として、授業時数が不足すると時間がかかる読解を飛ばしてしまう傾向がある。2学年においては、授業時数が十分確保されたかどうかも検討する必要がある。

3年生は3級合格レベルが24%であることが分かった。全国レベルと比較しても遜色がない。ただし、2極化の傾向もみられることが分かった。成績下位群の生徒をどのように目標レベル（英検3級合格レベル）までもっていけるかは、A校のみではなく、全国的な課題である。文部科学省は中学卒業時点での英語力の目安を英検3級レベルと設定している。全国的にみると3級レベルに達した生徒は26%程度である。つまり、4分の3の生徒は、文部科学省の設定した中学校卒業レベルに到達していない。これは、中学校英語教育の重要な課題である。4分の1しか達成できない目標は高すぎるのか。それとも、中学校の英語指導に問題があるのかのどちらかである。

通塾生と非通塾生を比べてみると、両グループに統計的な有意差は無かった。意外な結果ではあったが、学校の授業だけでも十分高い成績を上げる生徒が多くいることが分かった。

部活動参加者と部活動不参加者の間には統計的な有意差はなかった。しかし、部活動不参加者の中に成績上位生徒の割合が多かった。部活動と学習のバランスのとれた学校生活を送れるような生活指導が必要かもしれない。

予習・復習・宿題と成績との相関は予想したほど高いものではなかったことが分かった。予習・復習・宿題はしているものの、それが直接成績につながらないグループが存在することも明らかになった。予習・復習・宿題が本当の力をつけるものになっているのかどうか、または、させっぱなしにしていないかどうか検討する必要がある。また、中学校では予習・復習・宿題を評価に組み込むことも多い。そうだとすれば、学校が行う評定と予習・復習・宿題の相関は高いものになる可能性は高い。そのことは、評定は高いが英語の実力は低いという現実がある可能性を示唆している。同じようなことは通塾生と評定の関係にも言えるかもしれない。塾での学習が中間・期末対策のみとなっている場合は、通塾と評定の相関は高いかもしれない。

「好き・どちらかというと好き」を合わせた生徒の割合は3学年とも6割を超えている。前述したように、ベネッセが中学校2年生を対象に行った調査によると好きな教科として英語を選んだ生徒は25.5%である。それと比較すると「英語が好

き」としたＡ中学校の２年生の割合は若干少ないように思われる。

授業の理解度について、70% 以上理解しているとした生徒は１年生で 33%、２年生で 33%、３年生で 46% である。２年生以外は全国平均と比較するデータを持ち合わせていないが、１年生で 70% 以上理解している生徒が 33% というのは低すぎるのではないかと思われる。逆に３年生で 46% というのは比較的高いのではないだろうか。

態度面とスコアの関係は３学年を通して正の相関があった。英語学習にポジティブな態度であればあるほど英語の成績は高いことが分かった。

まだまだ詳しい分析を必要とすることは否めない。さらに詳しい分析を行いたい。また、今後は英語能力判定テストを広範囲に実施し、沖縄県中学生の英語力の実態を調査したい。

付記：本研究は公益財団法人日本英語検定協会の受託研究（児童英語検定及び英語能力判定テストを利用した児童・生徒の英語力及び態度面の関連に関する研究）を受けて行ったものである。沖縄県内のＡ中学校には調査に対して全面的な協力を頂いた。記して、深く感謝の意を表したい。